

ウェールズの聖杯伝説

——「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」から——

中 野 節 子

中世ヨーロッパ世界に、衝撃的な勢いをもって広がっていった、「アーサー王物語」と呼ばれた文学群がある。その中で「聖杯伝説」と名づけられた数々の作品が生み出されてゆく。その発端と展開のさまを見てみると、さまざまな興味深い問題が浮き彫りになってくる。なんといっても不思議な点は、それらの物語のほとんどのものがフランスを中心としたヨーロッパ諸国の産であるにもかかわらず、題材はブリテン島の古き先住民ケルト族の一派、ウェールズ地方で活躍したカムリ人の物語から採られており、それらを独自の方法で編纂して新たな作品が生み出されたということである。同時にまた、その後の発展の中には彼らに代わってブリテン島を支配することになったアングロ・サクソン系の作品は皆無で、すべてフランスものからの翻訳の形で伝播していつていること、そんな事実とは相反するように、この「聖杯」と呼ばれる聖なる遺物を求めての探求の地が、相変わらずブリテン島になっているといった点である。

「聖杯」を意味する「グラアル」(graal)という語は、オック語の 'gradal' に由来すると考えられており、12世紀の末、クレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(*Perceval ou le Conte du Grail*) (1182-83年頃)に、普通名詞として初めて現われてくる。クレチアンの続編作家たちの作品では平皿あるいは杯、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ (Wolfram von Eschenbach) の『パルチヴァール』(*Parzival*) (1210年頃)では宝石、聖杯伝説の古い痕跡をとどめるウェールズの「エヴラウクの息子ペレドゥル」('Historia Peredur vab Efrewc') (1300-25年頃)では、「切られた首」を載せた皿 (dysgl) となっている。

後に、「聖杯」と訳されて広まってゆくこの「グラアル」なるものは、たしかにキリスト教の影響を大きく受けた聖なる器ではあるが、その異教的なケルト起原については、大方の学者に認められた定説となっている。「グラアル」の原型としては、アイルランドとウェールズの物語の中に登場する、再生・豊穡・靈感をもたらす釜や、中身が尽きることのない平皿などが挙げられる。またキリスト教の正統的な版によればこの「グラアル」は、アリマタヤのヨセフがキリストを埋葬する際に、キリストの血を受け取ったエメラルドの器とされている。ケルト本来の見方によれば「グラアル」は、豊穡、知恵、不死といった観念と結びついた力と全体性の象徴である。「グラアル」を登場させている儀式は古代の王の即位式に属するものであり、この儀式の目的は、地上で神の原型を体現する、理想的で普遍的な王権の概念を浮き彫りにすることにあつたと考えられる。続く中世の原典の中で、「グラアル」という語がさまざまな形をとる中で 'sungreal' という形で現われてくるようになり、その曖昧さゆえに、いっそう示唆的な意味合いを帯びてゆく。この 'sungreal' という語を2つに分けて考えてみると、この語にはアリマタヤのヨセフ伝説に合致した「聖なる＝グラアル」(Saint-Graal)と同様に、現実のあるいは通過儀礼に現われる家系を示唆する「王の血」(Sang-Real)を認めることもできる。また「グラアル」に関連する原典は、すべて「グラアル」の守護

を予め運命づけられた一門の重要性について語っている。加えて、ケルトの慣例に従って、母系の一門の重要性が強調されている。一例として、ペルスヴァルが漁夫王の姉妹の息子となっていることなどが挙げられるだろう。「グラアル」はこの場合、単なる物体である以上に、通過儀礼を通じて、世代から世代へと伝えられる秘儀を象徴していると考えられる。

キリスト教の聖なる遺物とは到底似ても似つかぬ荒削りな野性的なものであるものの、明らかにこの「聖杯」のイメージを喚起したと想定される、もともとのウェールズ・ケルト人の物語、『マビノギオン』(Y Mabinogion)の第三グループ「エヴラウクの息子ペレドゥル」を中心に、その発端と展開のさまを考えてみることにする。

I ヨーロッパにおける「聖杯伝説」の発端と展開

A. フランス系の物語

聖杯の伝説の起原に、ウェールズの『マビノギオン』のロマンスものの一つ、「ペレドゥル物語」があることは多くの学者たちの認めるところである。しかしそれを一つの形式にまで高め、流布させたのは、フランダースのフィリップの宮廷で活躍した、シャンパーニュ生まれの宮廷詩人クレチアン・ド・トロワの未完の韻文物語、『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(1182-83年頃)である。すなわち「聖杯の神話」自体が、クレチアンが「発明」した文学神話と言ってもよい。

「聖杯」に対応する古フランス語「グラアル」とは、もともとは「広口でやや深めの杯」のことであると考えられる。時の経過を経て、それが至高の探求の対象として、象徴性をその本質とする一つの理念、聖なる遺物「聖杯」となっていくと推定される。クレチアンの作品が未完であったため、その後フランスの地で膨大な数の続編が生み出された。もともとのクレチアンの現存の作品中に語られるのは、「グラウル」の探索の発端のみである。すなわち、漁夫王の館を訪れたペルスヴァルの前に、二人の若者が、それぞれ「血の滴る槍」と金の燭台を掲げて現われ、宝石が埋め込まれた金製の「グラアル」と銀製の「タイヨワール」(聖杯をのせる受け皿)をもった二人の美しい乙女からなる行列が通過してゆく。これに先立ちペルスヴァルに、漁夫王から「剣」が授けられる。物語の後半で、ペルスヴァルは伯父にあたる隠者から、「グラウル」の中身は聖餅(ホスチア)であり、それが漁夫王の父(老王)を養ってきたこと、この老王とペルスヴァルの母と隠者とが兄弟姉妹であると知らされる。したがって漁夫王とペルスヴァルは従兄弟どうしの関係にある。

一方、クレチアンの影響を色濃く受けながらも、彼とは異なる別の素材を使ってまとめられたと推定される、ウェールズの「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」には、クレチアンとのさまざまな違いがみられる。たとえば血が滴る槍、平皿の上に置かれては運ばれてくる血まみれの生首等のイメージなどは、より野性的で生々しいケルトのものである。「ペレドゥル物語」の成立の年代は13世紀の半ば頃と推定されている。

クレチアンの『ペルスヴァル』の続編としては、4つの『ペルスヴァル続編』(*Continuations de Perceval*)が残されている。

作者不明の『第一続編』(*Première Continuation*) (1190-95年頃)に語られているのはゴーヴァンの冒険である。またヴォシエ・ド・ドウナン(Wauchier de Denain)の作である主人公をベルシヴァルにした『第二続編』(*Seconde Continuation*) (1190-1200年頃)、マヌシエ(Manessier)作の『第三続編』(*Troisième Continuation*) (1230-35年頃)等の作品が現存する。そこでは漁夫王によって、初めて「槍」はロンギヌスが十字架上のキリストを刺した槍であり、「グラウル」はキリ

ストの血を受けた盃で、それがアリマタヤのヨセフによってブリタニアにもたらされたと説明される。これら二編の『続編』の間に挿入されると考えられるのが、ジェルベール・ド・モントルイユ (Gerbart de Montreuil) 作の『続編』(1227-29 頃) で、母親を死なせた罪がそそがれていないベルスヴァルに、新たな試練が課せられる物語である。

「聖杯」のキリスト教化を決定的にしたのは、ロベール・ド・ボロン (Robert de Boron) で、彼の『聖杯由来の物語』(*Le Roman de l'Estoire dou Graal*)、または『アリマタヤのヨセフ』(*Joseph d'Arimathie*) (1200 年頃) の中でのことであった。舞台は新約聖書の時代のエルサレムに設定され、主人公はイエスの埋葬者となったと聖書に記された、アリマタヤのヨセフである。かねてからイエスを慕っていたヨセフは、最後の晩餐でイエスが使用した杯を所有しており、イエスを埋葬する際に横腹から出た聖なる血をこの器で受ける。この容器が聖杯であり、イエス自らがヨセフの一族を聖杯の守護者として定め、やがて彼らによって聖杯は西方、つまり、ヨーロッパへもたらされたと語られている。こうして「グラアル」という容器は聖なる血を受ける容器となり、カトリックの典礼における葡萄酒の容器カリス (聖盃) と同一視され、やがては東方から西方へもたらされたこの聖杯が、「旧約」の掟に代わる「新約」の象徴となってゆくのである。ボロンの三部作『ヨセフ』、『メルラン』、『デイド・ベルスヴァル』の最後の作品の中で、グラアルの守護がベルスヴァルに任される。

B. ドイツ系の物語

この「聖杯探求の物語」を完成させたのは、ドイツのウォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』(c 1210) である。前 6 巻 21694 行からなるこの壮大な物語は、パルチヴァールの父の冒険と結婚、パルチヴァール誕生を語るプロローグから始まって、父が戦死した後の母との森での隠遁生活、騎士に憧れてアルツル (アーサー) 王の宮廷に赴くパルチヴァールの成長と冒険と結婚、ならびに最初の聖杯城訪問のさまが語られている。400 人の騎士たちが居並ぶその城で、パルチヴァールは聖杯王アンフォルトス (Anfortas) から剣を授けられる。彼はまた、槍を掲げる従者と、25 人の乙女たちがそれぞれに蠟燭、象牙でできたテーブルの脚、貴石でできたテーブル、銀製のナイフのかずかず、そして宝石の「グラアル」を携えて入ってくるのを目撃する。アンフォルトスの苦しみを目の当たりにするも、礼儀作法を重視するあまりその理由を問うことをしなかったための挫折が描かれ、加えて友人ガヴァーンの冒険が語られている。この聖杯王として登場してくるアンフォルトスは、異教徒との戦いで辜丸に傷を受けている。そこには主人公パルチヴァールに聖杯の由来、聖杯守護の家系、パルチヴァールの犯した罪を説明してやる隠者が登場し、最後にはパルチヴァールが聖杯城を再度訪問し、アンフォルトスに正しい問いを発することによって、苦しみから解放し、パルチヴァールと彼とが、ほかならぬ伯父と甥の関係にあることが判明する。新しい聖杯王となったパルチヴァールは妻と二人の息子とも再会する。ここで隠者が語るパルチヴァールの過ちとは、当然知るべきことを知ろうとはしなかったという知的怠惰、並びに、相手の求めるものに気がつかなかったという倫理性の不足であると述べられている。最後にパルチヴァールは、「叔父上、どこがお痛みですか」と聖杯王アンフォルトスに尋ね、人間存在の根本にたつ、この癒しの力が神にあると信ずる謙虚な問いを発することによって、すべての問題が解決され、大団円を迎えるのである。ここで登場する聖杯は宝石となっている。それは天使たちによって地上にもたらされたものであり、人が望む飲食物を提供し、聖杯守護の人々の当然知るべきことと命と若さを保つ力を持った物体である。この「石」の上に文字が現れて神の意思が伝えられる。

C. 異種のロマンスもの

時代が13世紀にはいると、多くの散文ロマンスが書かれてゆく。それらほとんどの物語で強調されているのは、アーサー王の宮廷で最高の騎士とされるランスロットの姿となってゆく。

『聖杯の由来』(*Estoire del Saint Graal*) (1230-35年頃)には、アリマタヤのヨセフ一行のブリテンへの布教の顛末、彼の義弟ブロンとその息子が聖杯守護の家系の祖となること、急流の岸に建てられた聖杯守護のためのコルブニック城のことが語られる。『メルラン』(*Le Merlin*)には、「円卓」の由来とアーサー誕生の次第が語られ、『アーサーの書』(*Le Livre d'Artus*)においては、若き日のアーサー等の事跡が語られており、ここではペルスヴァルの父ペリノールが、漁夫王として登場している

『ランスロ本伝』(*Lancelot propre*)または『湖水のランスロ』(*Le Lancelot del Lac*) (1214-30年頃)では、父の死後、湖水の貴婦人に育てられるランスロの少年時代から始まって、彼がアーサー王の宮殿で随一の騎士となる次第と、王妃グニエヴルとの恋の顛末などが、多くのエピソードを混じえて語られる。ランスロットが媚薬に欺かれ、漁夫王ベレスの娘と一夜を共にすることから生まれた、息子ガラアドの成長が描かれる。ランスロ、ゴーヴァン、ボオールが聖杯探求の冒険をするが、いずれも失敗に終わる。

『聖杯の探求』(*La Queste del Saint Graal*) (1220-25年頃)には、いよいよ騎士となったガラアドがアーサー王の宮廷に到着し、「危険の座」に座る。晚餐に出現した聖杯を求めて、アーサー王の騎士たちは、全員が聖杯の真実を求めての探求に出発する。ランスロはコルブニック城で聖杯の秘儀を目撃するが、参加は許されない。騎士たちの中で「選ばれた者」となるのは、ペルスヴァール、ボオール、ガラアドの三人である。最後にコルブニック城で、「折れた剣」をつなぎ合わせ、「不具の王」を癒し、聖杯と共に聖地サラスに赴き、そこで王となったのは若者ガラアドであった。しかし彼は一年後の至高の儀式のさなかに逝去してしまい、それ以後、聖杯と槍は永久に姿を消してしまうのである。

『アーサー王の死』(*La Mort le roi Artu*) (1230-35年頃)では、聖杯の冒険で円卓の騎士32人中22人までが命を落とし、ランスロと王妃の仲も再燃し、傷心のアーサー王は、実の妹であるオルカニの妃との近親相姦で生まれたモルドレとの決闘で瀕死の傷を負って、妹モルガンによって船に乘せられて姿を消し、ログレス王国は滅亡する顛末が語られている。

以上概観してきた如く、「聖杯伝説」とおぼしき物語のかずかずは、クレチアンのもの(c.1180)から「アーサー王の死」(c.1230)の物語にいたるまでの、約50年間に、その主なるもののすべてが成立し、それ以降は姿を消しているということが分かる。

さまざまな「聖杯伝説」についての研究書の中で、R. L. ルーミス (Roger S. Loomis) の「聖杯」物語の成立年代にまつわる指摘は興味深い。ルーミスはこの50年間を1180年から1200年にかけての第一期と、1200年から30年にかけての第二期にわけ、主なる人物と事件、そして建造物等を次のように列挙している。

I 1180年から1200年に活躍した人物

1) ヘンリー (アンリ) 二世 (Henry II, 1113-89)

プランタジネット初代のイングランド王 (1154-89) となり、アイルランド、並びに西フランスを統治した人物。

シャルルマーニュの子孫を自認していたカペー朝に対抗して、王権の権威付けのためにアーサーと円卓の騎士の伝説を作り上げた人物でもある。

2) ヘンリーの妃アキテーヌのエレアノール (Eleanor of Aquitaine, 1122? -1204)

アキテーヌ公ギヨーム九世 (ボワチエ伯七世) の孫娘。フランス王ルイ七世 (Louis VII) の妃であったが離婚。

英国王ヘンリー二世の妃となり、獅子王リチャード、ジョン王の母となる。南仏のオック語圏で発展していた宮廷文化を、北フランスとイングランドのアングロ・ノルマン宮廷に導入した、12世紀後半の最大の文芸庇護者の一人である。彼女の娘マリー・ド・シャンパーニュがクレチアン・ド・トロワに書かせたという騎士物語『荷車の騎士』において、アーサー、グイネヴィア、ランスロットの三角関係が初めて登場する。

3) 獅子王リチャード (Richard the Lion-Hearted, 1157-99)

ヘンリー二世の第三子、父の後をついで、プランタジネット朝第二代のイングランド王となる (1189-99)。

第三次十字軍に従軍し、クルドス、イスラム世界を代表する君主サラディン (Saladin, 1138-93) と戦い、聖なる墳墓奪還に成功する。並びにフランス王フィリップ・オウガスタス (Philip Augustus) を破る。

II 1200年から30年にかけて活躍した人物と事件

1) ジョン (John, 1167? -1216) 王

フランスと戦って、大陸の領土の多くをフィリップに譲り、教皇イノセント三世 (Innocent) との争いに敗れる。1215年に、ラミニードの地で、大憲章 (マグナ・カルタ) (Magna Charta) への署名を余儀なくされる。

2) 三回にわたる十字軍の遠征

1. 南フランスの異端派マニ教の一派を攻撃する。結果としてトロバドール (叙情詩人) 集団が減びてゆく。
2. コンスタンティノーブルにむかい、西方と東方教国が対立する。西方におびた数多くの遺跡が持ち込まれる。
3. 自由思想家フリードリッヒ二世 (Friedrich II, 1194-1250) による遠征。しばらくの間イスラム教徒とエルサレムを共有することに成功する。

3) スペインの聖ドミニク (St.Dominic, 1170-1221) とイタリアの聖フランシス (St.Francis, 1181? -1226) による托鉢修道士団の設立

III 建造物

1) ノートルダム大寺院, ウェルズの大聖堂, リンカーンの内陣等の建設

2) パリ, ボローニャ, オックスフォード大学の建設

ルーミスは、これらの史実からも明かなように、「聖杯伝説」の数々が書かれたのが、ヨーロッパ各地で芸術や知的熱望の気運が高まった時代であったと指摘する。この「聖杯」のロマンスは、このような大きな実験的、創造的な時代に堰を切ったように生まれたのだった。

中世は、女性の黄金時代であったとされる。彼女たちの地位が頂点に達したのは、まさにこの封建時代 (10世紀から13世紀) であった。それに続く二世紀間は何とか持ちこたえたものの、ルネッサンス期を経て近世になり、新興の町人階級がその政治権力と経済・行政権力を結びつけながら発

展していくに連れて、社会における女性の地位は弱まっていく。中世では女性は結婚しても夫と異なる姓を名のることができ、自分の財産は自分で管理し、固有の領地や臣下を持ち、投票権もあり、政治・社会・文化に深く、広くかかわって生きることも可能だったのである。戦争をしないで領土を拡大する、最も有効な方法は婚姻にあった。王妃となった女性たちが、子どもをたくさん生んで西欧中にちらばらせ、複雑な血縁関係をつくっていったのもこの時代である。トルコ人に奪われた聖地奪還のために、ヨーロッパのキリスト教徒が11世紀から13世紀にかけて派兵した十字軍の遠征にも、女性たちの多くが同行し、異国の地での華麗な社交生活を展開している。そんな女性たちの中でも、アキテースのエレアノールは代表的な人物である。彼女は12世紀のフランスとイングランドを舞台に、激しく生きた英仏両国の王妃であった。二度の結婚によって7人の子どもをもうけたが、そのうちの3人の王の母となり、娘や孫たちを各国の支配者に嫁がせて、「欧州の母」とも呼ばれている。たくさんの侍女を連れ、野営地で敷く絨毯、衣服、毛皮、宝石類、料理用具一式を積み込んだ多くの荷車を従えて、夫ルイと共に、東方の魅力に取りつかれた冒険心をもって、十字軍にも参加している。

Ⅱ ウェールズの聖杯伝説 —「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」—

『マビノギオン』に収録されている11の物語の中でも最も長く、また最も複雑に入り組んだこの物語は、のちに「長槍のペレドゥル」(Peredur Paradr Hir)とも呼ばれるようになって知られる、アルスルの宮廷の代表的な騎士ペレドゥルの成長を綴った英雄物語である。

ペレドゥルの父は、ゴグレズ(イングランドの北、ならびにスコットランドの南一帯)に領地を持つエヴラウク伯爵の7番目の息子であった。しかしながら父と兄たちはすべて戦闘のなかで命を落とす。それを憂えた母親の配慮により、戦争とは無縁な深い森の中で、女や子ども、そして戦いを好まぬ穏やかな男たちとの隠遁生活を送っていた。やがて時がくると、この森の側を通りかかったアルスルの宮廷の騎士たちに出会い、騎士というものに憧れて、母の嘆きをあとにして、自らも騎士になるべく森を出てゆくのである。

母親の助言に従い、旅を続けるペレドゥルに大きな転換の時が訪れる。それは母方の二人の伯父たちとの遭遇である。物語はその様子を次のように述べている。

A. 母方の親族たち

1. 第一の伯父の城で

大きな荒涼とした森の端、湖の岸でペレドゥルが最初に見た城は、次のように記されている。

森のはしには湖があり、湖の向こう岸には大きな城があり、そしてその城のまわりには堅固な城壁がめぐらされていた。湖の岸には、絹の錦織の衣装をまとった白髪の男が絹の錦織のクッションにすわっており、湖の上では、二人の若者が釣りをしていた。

白髪の男は、ペレドゥルのやって来るのを見ると、立ち上がって、城の方に向かって歩みを進めた。男は片足を引きずっていた。(286)

水辺で釣りをしている若者の姿を考えると、足を引きずって歩くこの「白髪の男」は、「漁夫王」であることが分かる。

城の大広間に入れてもらったペレドゥルには食事が供され、それが終わると、城主がペレドゥルに短剣の投げ方を心得ているかと尋ねた。「教えてもらえば、きっとできるようになると思います」と答えるペレドゥルに、黄色い髪と、亜麻色の髪をした二人の息子たちが、側にあった棒切れと楯をあやつってみせ、ペレドゥルは城主に促されて、息子たちの中でより強いと思われる黄色の髪の若者に挑戦し、勝利する。白髪の城主は、「そなたは、この島で最も優れた短剣の投げ手になるであろう」と予言し、自分は「そなたの母、そなたの伯父にあたる者だ」と名乗る。ペレドゥルに自分としばらく一緒にいて、行儀と作法を学ぶことをすすめて、「いまや母親の言葉を離れるときなのだ」と語り、そうすれば自分がペレドゥルの師となり、騎士にも任じてやろうと言う。伯父の、「何か奇怪なことを見ても、それを自分で追求せぬこと、そうはしないで、親切に教えてもらうまで待つのだ。とがめられるのはそなたではなく、師である私なのだから」という言葉が、後から問題を生む提言となっている。その晩この城で眠りについたペレドゥルは、翌朝、伯父の許しを得て出発する。

2. 第二の伯父の城で

大きな森へさしかかったペレドゥルは、今度は次のような城を目撃する。

森のはずれにある平らな草原までやってくると、ゆくてに、巨大な城壁と見事な城があるのが見えた。

ペレドゥルは城へ向かい、扉が開いているのを見て広間へ入っていった。

入ってみると、広間の一方に白髪の男がすわり、そのまわりには大勢の従者がいて、みんなペレドゥルを迎えて立ちあがり、たいそう丁重にもてなしてくれたのだった。(288)

白髪の男の言葉に従って、短剣を手にしたペレドゥルは、大広間にたっている大きな円柱にむかって短剣を投げそれを二つに砕き、同時に短剣も二つに折れてしまう。このようにして二回は円柱と短剣をもとに戻すことに成功したペレドゥルも、三回目には、両者をもうもとの状態に戻すことはできなかった。白髪の男は、「私こそはそなたの伯父の一人、母の兄であり、そなたがゆうべ泊まった城の主の兄弟にあたる者だ」と名乗る。

親しく語り合う二人の前で、次のような場面が展開される。

すると、二人の若者が広間に入ってきて、まっすぐ部屋へと進んでくるのが見えた。とてつもなく大きな槍を持ち、その槍の口金の部分からは、三筋の血潮が床へ流れていた。このようないでたちで若者が入ってくるのを見ると、一同は叫び声と悲しみの声を上げたので、耐えがたいほどになってしまった。(289)

しかしながら白髪の男は、何事もないかのように会話を続け、目の前で展開された異様な情景については何の説明もせず、またペレドゥルも尋ねようとはしなかった。テキストは次のよう続ける。

それから、しばらくしんと静まりかえったあとで、見よ、二人の乙女が入ってきた。大きな金属製の盆を持ち、その盆の上には男の首が載っており、首のまわりには大量の血が流れていた。そしてまた一同が悲鳴と叫び声をあげ、この家の中で、彼ら二人と同じように平然としていられる者はいないという状態になった。(289～290)

伯父とペレドゥルは会話はやめたものの、思う存分腰を落ちつけて、飲み込んだ末、その晩は

一同そろって眠りに着き、ペレドゥルは翌朝早く、伯父の許しを受けて出発していったと記されている。

フランスのクレチアン、ドイツのエッシェバッハに登場してくる宝石がはめ込まれている金製の見事な聖杯の影は、このウェールズの物語には存在しない。あかあかともされる燭題の光もなく、描かれているのは平皿に載った血染めの生首の壮絶なイメージである。またこの「ペレドゥル物語」では、最後にもう一度主人公ペレドゥルが聖杯城へ戻ってきたときの様子が述べられ、そこで初めて、この不思議の秘密が明かされる。

3. 「不思議の城」(Caer yr Enryfeddodeu) の物語

それから、ペレドゥルは山に沿って進んだ。すると、山のずっと向こうの溪谷の中に、一つの城があるのが見えた。

城の中に入ると広間があり、扉は開いていた。

入ってゆくと、足の悪い白髪の男が広間の奥にすわり、グワルッフマイがそのかたわらにいて、ペレドゥルの馬がグワルッフマイの馬と同じ厩にいるのが見えた。

二人はペレドゥルを歓迎し、彼はその白髪の男のもう一方の側に座を占めた。すると一人の黄色い髪をした若者がペレドゥルのまえにひざまずいて、彼の友情を求めたのだった。(343)

足の悪い白髪の男というのは、明らかにペレドゥルが最初に遭遇した、湖の向こう岸にある城に住む第一の伯父のことである。ここではまた、「ペレドゥル物語」に挿入されたもう一人のアルスルの宮廷の騎士、グワルッフマイの姿も登場している。この黄色い髪の若者は、つづいて次のような奇妙な告白をする。

「私が、黒い乙女に姿を変えてアルスルの宮廷に参上したのです。それからあなたは、盤を投げ捨てて、エスピディノンギルからやって来た黒い男を殺し、次いで鹿を殺し、石の厚板の下にいる黒い男と戦われた。また、この私が、血だらけの首を盆の上に載せて運び、切っ先から握りのところまで血が流れている槍をもって運んだのです。あの首は、あなたの従兄弟の一人もの。彼を殺したのはカエル・ロイウの魔女たち。あなたの伯父を足なえにしまったのも、あの魔女たちです。そして私は、あなたの従兄弟にあたる者なのです。あなたがこうして仇を返してくださることは、まえもって予言されていたのですよ。」(343~4)

ここで若者が説明しているのは、ペレドゥルが第二の伯父の宮廷で目撃したあの不思議な光景である。

ペレドゥルとグワルッフマイの二人は、アルスルと彼の軍勢にきてくれることを依頼し、彼らの助けを受けてカエル・ロイウの魔女たちを一人残らず殺し、ペレドゥルはめでたく仇を打ったと語られている。

ヨーロッパに流布した他の物語と比して、ウェールズの「聖杯伝説」と目されている、この「ペレドゥルの物語」は、きわめて不思議な物語であることが分かる。それをいったいどのように解釈できるのだろうか。学者たちの解釈のいくつかについて考察を加えてみたい。

B. ブラン伝説の影

A. ナット (Alfred Nutt), R. ルーミス, 等のウェールズの学者たちは, この皿の上に載せられた首が, ケルト人, または北方のピクト人たちの間の, 首狩の伝統を髣髴とさせると示唆している。彼らは人の首には神聖や魔力が潜んでいると信じ, 戦闘のときには好んで敵の首を駆り集め, 戦勝の印として飾っては, 敵を恐れさせていた。首にまつわるイメージは, 『マビノギオン』の中にもたびたび登場してくる。「キルッフとオルウェン」(‘Culhwch ac Olwen’)の中に登場する, オルウェンの父巨人イスバザデンの首を取るまでの話の中にも, 再三現われてくる。しかしなんといっても強烈な印象は, 第二話「ブランウェン物語」(‘Branwen uerch Llyr’)の中の, ベンディゲイドブランの首にまつわるイメージであろう。アイルランド人たちとの激しい戦闘の末, 脚に毒槍での傷を負い, 残った7名の家来の者たちに首を切り落とさせた後, 彼らと共に80余年にわたって各地を旅する首である。その生首は決して腐ることなく, 一行と共に宴を楽しみ, まるで生きているときさながらであったという。禁忌をやぶって腐り始めた首をロンドンの地で葬った後でも, この首がしばらくの間ブリテン島を敵の襲来から守り続けたと述べられている。このスィールの息子ブランの姿には, 半分人間, 半分神聖を有する古きケルト人の神の姿が重なり, アイルランドに伝えられた「ブランの航海」(‘Voyage of St. Brendan’)の物語が語る如く, アイルランドの地から別世界へ旅した人物の姿が重なってくる。これはこの第二話「ブランウェン物語」が, 明らかに後から, 「四つの物語」(‘Pedair Keinc y Mabinogi’)グループに挿入されたものであること, もともとはアイルランド生まれのこの物語が, キリスト教の洗礼を受けたのちに, 「ベンディゲイド」(bendigied)すなわち「聖別」されて, ウェールズの物語に留められた過程を示唆している。このブランが「足に傷を負った者」, すなわち第二話の別のところで, 「モルズウィド・テスィオン」(Morddwydd Tyllion)と呼ばれているのも興味深い。そこにはたしかに, 多くの「聖杯伝説」に登場する聖杯の守護者「漁夫王」のイメージが重なってくるからである。

C. 復讐のテーマ

A. ナットをはじめとしたウェールズの研究者たちは, ペレドゥルの物語の中のこの血塗られた首に, 母方の親族と自分の父や兄弟の死にたいする仇討ちのテーマを見出している。そこには当然のこととして, 不当に奪われてしまった領地の正統な統治権を取り戻そうとする, 「失われた土地」(‘The Lost Land’)のテーマも入り込んでくる。この統治権はウェールズの物語の中では, 常に女性たちと結びついて考えられている。物語の中ではペレドゥルとコンスタンチノーブル (Ysbidionngyl) の女帝 (黒い娘と同一人物) との結婚による, 14年間の統治に象徴されるエピソードがその一例である。

G. ゴイティンク (Glenys Goetinck) はこの「平皿に載せられた首」(‘pen ar y ddysgl’)を, ウェールズの年代記 (Brut y Tywysogion) に登場し, その栄光と運命が記録されている, 「ブリトンの長であり, 楯であり, 保護者であった」(‘pen a tharyan ac am diffyrwr y Brytanyeit’), セウエリンの息子グリッフィズ (Gruffudd ap Llywelyn, d.1063) のものと解釈している。彼こそはデハイバルスの王オワインの息子マレディッツ (Maredudd ab Owain) の孫であり, 1018年から1023年までグイネッツを支配したセイシストの息子セウエリン (Llywelyn ap Seisyllt) の息子として, 1039年にはグイネッツ並びにボイスの王となり, 1050年代後半にデハイバルスを制定したのち, グウェ

ントとモルガヌクも制して、1057年頃にはイングランドに奪われてしまっていたオッファの堤防を越えた地方を奪還し、唯一の君主として全ウェールズにその統治力を及ぼすことになった人物である。しかしやがては、義父に肩入れしてイングランドの内政に干渉したことで、ウェセックス伯ハロルドのウェールズ侵攻を招くことになる。最後には、1063年に、仲間のウェールズ人の裏切りによって首をとられ、ハロルドに献上されるという悲劇に見舞われて、果てることになった人物である。

ゴイティンクはまた、この「白髪の子」(‘gwr gwynllwyd’)は、年老いたケナンの息子グリフィッツ(Gruffudd ap Cynan, c.1053-1137)であると解釈する。彼はウェールズ北王朝の祖と考えられているキネツザ(Cunedda)とロドリ・マウル(Rhodri Mawr)につながる自分の正統な家系を引き継いだグイネッツの王である。アイルランドへの追放、ノルマン人による幽囚といったかずつづの試練の末、1094年には幽囚の身から逃がれ、1100年から1114年頃までには、イングランドのヘンリー王に追われるくらい強力な指導者となってゆく。グリフィッツは戦いにおいて勇敢であったのみならず、アイルランドとの関係を強化し、彼の地からの文学の伝統をウェールズの地にも導入し、詩人たちを支援し、文芸の分野を確立することにも大きな影響を与えたことで知られている。しかしながら後年は盲目となり、1132年息子カドワッソンを失い、1135年には長年の宿敵ヘンリーが亡くなったことによってほっとするものの、自らもその2年後に命を落とすことになった人物である。

「ペレドゥル物語」を含む『マビノギオン』の第三グループ、「フランス風のロマンス」の成立に当たっては、1135年の宿敵イングランドのヘンリー王の死という時代背景が大きな意味を持っていたと考えられる。長年にわたるアイルランドの地での生活の中で、11世紀に盛んになったアイルランド文芸復興の息吹を痛切に肌にしみ込ませたグリフィッツは、アングロ・サクソン人のイングランドのみならず、迫りくるより強力な征服者ノルマン・フランス人に抵抗すべく、民族の自立の必要を痛切に感じていたに相違ない。文芸をことのほか重んじた指導者であったグリフィッツの奨励を受けたウェールズの詩人(ケヴァルウィッツ)(cyfarwydd)の手によって、ウェールズ再興の夢をかけての編纂・執筆の仕事が一気に始まったと推定されるからである。その後のウェールズとイングランドの激しい攻防の歴史を考えると、ケナンの息子グリフィッツへのウェールズ発展の期待が高まった1135年から、「最後のプリンス」(Y Llyw Olaf’)といわれたグリフィッツの息子セウエリン(Llywelyn ap Gruffudd)の首がロンドンに送られて、ウェールズ独立の夢が完全に断ち切られてしまう1282年までの、150年に及ぶ年月のもつ意味は重い。このように大きな期待と、度重なる裏切りに彩られたウェールズの歴史のなかで、「血塗られた首」に対する復讐のイメージは、鮮明すぎるほど生々しく迫ってくるからである。宮廷の広間に満ちる人々の嘆きの声は、この危急存亡のとき、国の指導者を失ったウェールズ人のうめきであるとも考えられる。ペレドゥルが目撃した第二の伯父の城の広間に入ってくる「平皿に載せられた首」の、「首」を表す言葉‘ペン’(pen)は、「長」とか「国の指導者」をも意味する言葉でもある。またペレドゥルの使う槍というのは、南ウェールズの弓にたいして、12世紀においては、北ウェールズを代表する武器であったことも想起される。彼の祖先が北に領地を持っていた一家であるとする、ペレドゥルに課せられた課題というのが、奪われた地の奪還、正統なる統治権の復活であったことは明らかである。そこにはまた、常にブリトン人の父祖の地として考えられ、再三登場してくる、ある一つの土地のイメージが浮かんでこよう。それは、北はスコットランドのスターリングからロソホ・ローモンド、南はカンブリア地方を越えて、ランカシャーとヨークシャーのほとんどの地方をも含んだ、「古き北の地方」(‘The Old North’)である。なんとかしてその地をもう一度われらの手にというウェー

ルズ人たちの熱き思いが伝わってくる。かつてこの地を支配していた時代の、往年の力への回帰の思いは、「詩人の中のプリンス」(‘Aneirin Gwaudrydd Mechdeyrn Beirdd’)とうたわれている国民的詩人アネイリンの「ゴドズイン」(‘Y Gododdin’)等の古詩や、英雄王ウリエン・レゲド(Urien Rheged)とその息子オワイン(Owain)の宮廷詩人であったタリエシン(Taliesin)の悲歌の中に連綿として伝えられる民族の「渴望」(ヒラエス)(‘hiraeth’)である。こう考えてくると、この地に残された統治権を求めての探求の伝統を、北ウェールズの地とその指導者に当てはめて創作された物語が、「ペレドゥル物語」であったと思えてくる。「三つのロマンス」は、ウェールズの人々に、初期の彼らの英雄の冒険、その名にまつわるかずかずの栄光、失われた統治権を求めての探求のさまを思い起こさせ、彼らの気持ちを鼓舞することを目指して、書かれた作品であるように思われるのである。

「ペレドゥル物語」の最後の場面で明らかにされる、「不思議の城」を求めての旅の物語のもつ意味は大きい。そこに登場してくるペレドゥルの従兄弟と名乗る若者は、黒い乙女や首を運んでくる娘というような女性になるかと思うと、ペレドゥルに立ち向かってきた黒い男たちへと変身する、変幻自在な存在である。ペレドゥルが最後に到着した城はたしかに、かずかずの不思議な光景を目撃した第二の伯父の城であるのに、そこにいる男は脚に傷を受けている第一の伯父である。このように、男性性と女性性、表と裏、正と負の両面を併せ持つこそ、完全なる一つとなるという考え方は、この物語の他の場所にも再三登場してくる。たとえば、ペレドゥルが旅の始まるときに目撃する不思議な樹木、「片側は根もとから梢まで真っ赤に燃え、もう一方の側には緑の葉がついている」高い樹、川を越すと黒から白に、また黒から白へとその色を変える不思議な羊の群れ等の存在である。このように、正は負に絶えず変化し、写り変わっていくことの中にこそ真理があるとするウェールズ特有の考え方は、ケルト美術に現れる渦巻き模様に象徴的に示されている世界観でもある。「時」とてもその例外ではなく、常に変幻やまぬ螺旋を描いて進行するという彼らの考え方を、これほどまでに鮮明に打ち出した物語は他にない。

長く、複雑な旅を重ねてきたペレドゥルは、捜し求めたこの「不思議の城」で、第二の伯父の城で見た不思議な場面で示された究極の意味を知る。すなわち平皿の首は失われた統治権を、血を流す槍は戦いと首の復讐を、そこで遭遇した一人の娘は主権そのものの象徴であることを理解するのである。こうしてすべての準備が整ってから、再度戻っていった伯父の城で、ペレドゥルは妻とも再会する。これですべての謎が解き明かされたことになり、ペレドゥルはカイル・ロイウの魔女たちを討って、親族の復讐を遂げ、その目的を達成したと、この「不思議の城」の物語は結ばれている。

以上見てきた如く、1180年から1230年頃にわたる、約50年間に生まれた「聖杯伝説」と呼ばれる一連の物語は、ヨーロッパ各地で展開される、その後の歴史の動きを予言するかのような作品となっている。イングランドとフランスという二つの国を治めたヘンリー二世とその妻エレアノールによって、物語を生む背景はすでに整っていた。プランタジネット王朝の権威づけのために、シャルルマーニュ(Charlemagne)と12臣将に対抗する、アーサーと円卓の騎士伝説を新たに作り出したヘンリーは、ジョフリー・オブ・モンマス(Geoffrey of Monmouth)という学僧に命じて、『ブリタニア列王記』(*Historia Regum Britanniae*)を書かせている。次にはそれをもとにして、宮廷のアングロ・ノルマン人の学僧ワース(Wace)に、そのラテン語文献を、土地の言葉(ここではアングロ・ノルマン語)で物語化することを命じるのである。こうして生まれたのが『ブリュ物語』(*Bruts*)であった。ヘンリーとエレアノールの娘たちは嫁ぎ先の宮廷で、クレチアンを初めとする

宮廷お抱えの詩人たちに、騎士と貴婦人たちを主人公にする多くの作品を書かせている。

物語の素材を提供したウェールズの地の「ペレドゥル物語」には、迫り来る圧倒的な政治力をもった強大な敵、アングロ・サクソン人に対する最後の抵抗の姿勢を示す如く、失われた彼らの正統な統治権をもう一度取り戻し、先祖の仇を討つという「復讐のテーマ」が色濃くあふれた物語が語られている。同様にまた、度重なる戦乱の末、ブリトン島の領土のみならず、本土フランスの地までも脅かされるようになった、南フランスのアンジュー王朝の諸侯たちの将来に対する不安を示すが如く、宮廷作家クレチアンを初めとしたフランス系ロマンスの数々には、失われてゆくブリテンへの憧憬と共に、物語という文化を使つての新たな侵略の道を探るとてもいふような、絢爛たる王朝絵巻の前兆の「聖杯物語」が書かれている。そしてまた遅まきながら、ヨーロッパ北部に勢力を拡大しようと狙うゲルマン系のドイツの「聖杯伝説」には、南部を牛耳る圧倒的な教皇権に挑戦するような、キリスト教の香りをたっぷり漂わせた物語が描かれてゆく。ローマ・カトリック教会に95ヶ条にわたる論題を突きつけて反省を求めた、ルターの宗教改革（1517）へと続く道は、エッシェンバッハの物語の中で強調される、当然知らねばならぬことを知ろうとしなかった、知の怠惰の罪が断罪されるというテーマから始まったとも考えられる。社会の内部からわきあがってくる知の探求の欲求と共に、背景となる12世紀後半から13世紀にかけてのヨーロッパは、十字軍の結果としてもたらされた東方圏の文化の影響が色濃く現れてくる時代でもあり、宗教圏の分裂と共に文化の多様性にも目覚める変動期を迎えていた。一方で、次第に中央集権化し、封建制を強める中では、それまで華やかに、生き生きと活躍していた女人たちの力も衰退してゆく。彼女たちと共に宮廷のサロンを彩っていた詩人たちの口頭文芸の世界も姿を消し、世はまさに文字文化の時代、読み物中心の時代を迎えていた。その狭間に存在した、半分語りもの、半分は読みものとして生まれたロマンスの中で花開いた物語が、数々の「聖杯伝説」であった。

さしもの人気を誇った「聖杯物語」も、1180年から1230年を頂点に影を潜めるようになり、つづく13世紀後半頃から14世紀のはじめ頃までの時代になると、壮大な国家的・宗教的な夢や期待を語る物語から、道ならぬ恋の顛末を描く個人的な物語に関心が向かってゆき、理想の騎士ランスロットや若い騎士トリスタンを主人公とした多くの物語が書かれるようになる。14世紀から15世紀にかけて、すくなくとも8件から9件のランスロットものが、また6件のトリスタンものが残っている。時代はすでに、個人の問題が主流を占める、近代へと確実に進んでいたのである。

- ・この論文は、第24回日本ケルト学会議大会(2004年10月10日、慶応大学・日吉キャンパス)のフォーラム・オン「聖杯伝説－その起原と展開を再考する」での報告に加筆修正したものである。コーディネーターの渡邊浩司氏(中央大学)、並びに4人の報告者諸氏に心からの感謝を捧げる。
- ・論文中に引用した使用テキストは、中野節子訳・徳岡久美協力、『マビノギオン』(JULA出版局、2000)である。()の数字はページを表す。

参考文献

- 1) Bartrum, Peter C., *A Welsh Classical Dictionary*, Cardiff, 1993.
- 2) Bromwich, Rachel, edited and translated, *Trioedd Ynys Prydein* (*The Triads of Britain*), Cardiff, 1961, second ed., 1978, third ed., 1998.
- 3) Goetinck, Glenys, *Peredur – A Study of Welsh Tradition in the Grail Legend*, Cardiff, 1975.
_____, *Historia Peredur vab Efrauc*, Cardiff, 1976.
- 4) Loomis, Roger S., *The Grail – From Celtic Myth to Christian Symbol*, Cardiff, 1963.
- 5) Nutt, Alfred, *Studies of the Legend of the Holy Grail*, London, 1888.
_____, *The Legends of the Holy Grail*, London, 1902.
- 6) Penner, Meirion, *Peredur*, Llanerch, 1991.
- 7) Stephens, Meic, *The New Companion to the Literature of Wales*, Cardiff, 1998.
- 8) Weston, Jessie, *The Quest of the Holy Grail*, London, 1913, Dover, 2001.